

自由保育における保育者の援助の仕方について

—効果的なチームティーチングの実践方法を考える—

太田 雅子、千葉 一恵、長谷川 淳子
津田 之子、内藤 容子、宮本 裕子

1. はじめに

北陸学院短期大学附属第一幼稚園においては、チームティーチングという方法を用いて、幼児に対して指導や援助を行っている。第一幼稚園のチームティーチングは、5人の保育者が自分の担当するクラスの子どもたちだけではなく、全園児に対応するという方法を用いている（複数担任制とは異なる）。登園時から約1時間半の間は自由保育の形態を取っているが、主にこの時間帯においてチームティーチングを実践している。各保育者は、遊びの内容や設定場所、役割分担や担当についての前日までの話し合いに基づいて、自分の担当する部屋や遊びの設定場所にスタンバイし、そこにやってくる子どもに対応する。

この自由保育という形態ならびにチームティーチングという方法は、幼児の自発的・主体的な活動としての遊びを中心とした生活が展開され、その中で成長・発達に必要な体験が得られるように、一人一人の子どもに応じた指導が行えることを目的として導入された方法である。

しかしながら、こうした目的に沿った保育が実際に展開されているのか、今行っているチームティーチングは効果を来しているのかをじっくりと評価することなく来てしまったように思える。そこで、一旦立ち止まって第一幼稚園の保育を検証する必要があると考えた。今回の研究は、自分たちの保育実践を分析して問題点を探り、改善を図るための方策を検討し、またより質の高い保育実践を目指すための取り組みである。

検討する課題は以下に述べる点である。

研究課題：自由保育において子どもたち一人一人の遊びの様子を把握し、成長・発達を助長するための援助の方法を探る。

- a. 個々の子どもを把握し、援助するためのチームティーチングにおける効果的な方法を探る。
 - 1) 自由保育における遊び・活動の設定と保育者の位置ならびに子どもとのかかわりの頻度、質についての現状分析を行う。
 - ・タイムサンプリングとビデオ撮影による附属第一幼稚園の現状分析
 - 2) 指導計画（日案）の見直し、効果的な日案の様式・記録簿の作成（遊び・活動ならびにその

太田 雅子・千葉 一恵・長谷川淳子・津田 之子・内藤 容子・宮本 裕子

設定場所の選択、保育者の配置・移動の図式化、チェックリスト、個人記録簿を含む)

3) 新たに作成した日案・記録簿を用いての実践に対する評価(個々の子どもの必要をどの程度認識し対応できたか。)

b. 子どもの全人格的発達を促す指導計画(遊び・活動の選択)と環境構成のあり方を探る。

1) 発達の法則、メカニズム、機能についての観点から発達を促す(刺激を与える)要素をバランスよく含んだ遊び・活動とは何かを検討する。

・園の実情に合った遊び・活動を選択する。

・実践、記録、評価を行う。

2) 効果的な保育空間の構成とは何かを検討する。

・実践、記録、評価を行う。

今回の研究は1998年7月から開始され、複数年に渡って実施するものであり、本論文は、以上の課題に沿っての研究経過をまとめた中間報告である。

2. 現在の保育実践の分析

1) 自由保育における問題点: 個々の様子の把握

自由保育というのは、子どもの自由性を尊重し、自由活動を最大限に許容する中で、子どもが主体となり自発的に活動することを重視した保育である。幼児の主體的な環境との相互作用は学習を促進させ、成長・発達に繋がる。しかしながら、自由だからといって、好き勝手にさせておいてよい訳ではない。幼児を取り巻く環境の中に明確な教育的配慮がないのであれば、また個々の子どもの実態を把握し、それぞれに適した指導がなされなければ、自由保育は放任に陥る危険性がある。

第一幼稚園では、登園後目診を受け所持品の始末を済ませると、子どもたちは三々五々に園舎中に散らばり思い思いの遊びを始める。3歳児もその多くは1学期には主に自分の保育室に設定された遊びに参加し、2人のクラス担任との関わりが中心となっていた。しかし2学期に入ってから、少しずつ行動範囲も広がり、ホール、廊下や他の学年の保育室において年長の子どもたちと一緒に遊ぶ姿が見られるようになった。このように学年が入り交じり、園舎のあらゆるところで遊びを展開している子どもの状況に対して、個々の様子を把握するのが困難であるという反省が出てきた。

そこでまずは、保育者が自分の受け持つ範囲において子どもたちとどのくらい関わっているのか、どの程度把握しようと努めているのかをタイムサンプリングを用いて客観的に分析してみることにした。

2) タイムサンプリングの実施: 方法と結果

〈方法〉

1998年7月13日9時30分から10時30分までの間に実施。

自由保育における保育者の援助の仕方について

ホール、プレイコーナー、5歳児保育室「ゆり組」、4歳児保育室「たんぼぼ組+ひかり組」、3歳児保育室「ことり組」において次の項目について観察を行った。

項目：1. 子どもの人数

2. 保育者の所在の有無

3. 保育者と子どもの関わり

1) 保育者A・B・C・D・Eが直接関わっている-子どもの人数。

2) 保育者A・B・C・D・Eが見守っている。

3) 保育者A・B・C・D・Eは関心を払っていない。

15秒間観察し、15秒間休むという方法で観察し、シート(図1)に記入した(チェックする)。

1分間に2枚、合計120枚のシートを用いて発生の頻度を調べた。

観察は事前にオリエンテーションとトレーニングを受けた北陸学院短期大学保育科2年の学生5名が行った。観察者は各部屋の隅に位置し、テープの合図(15秒間隔で「はじめ」「やめ」が録音されているテープをイヤホンで聞きながら行う)にしたがって観察シートに記入した。

対象は園児63名、教師5名。教師(保育者)の担当場所はA-ホール、B-たんぼぼ組+ひかり組、C-ことり組、D-プレイコーナー、E-ゆり組であった。

7月13日 9時30分30秒 ~ 9時30分45秒 場所：たんぼぼ + ひかり組	
子どもの人数： 1 ~ 5人 _____ 6 ~ 10人 _____ 11 ~ 15人 _____ 16 ~ 20人 _____ 20 ~ _____	保護者の有無： 有 A _____ B _____ C _____ D _____ E _____
保護者と子どもの関わり： (保護者A) 直接かかわっている _____ _____人と 見守っている _____ 関心を払ってはいない _____	(保護者B) 直接かかわっている _____ _____人と 見守っている _____ 関心を払ってはいない _____
(保護者C) 直接かかわっている _____ _____人と 見守っている _____ 関心を払ってはいない _____	(保護者D) 直接かかわっている _____ _____人と 見守っている _____ 関心を払ってはいない _____
(保護者E) 直接かかわっている _____ _____人と 見守っている _____ 関心を払ってはいない _____	観察不可能

図1 観察シート

太田 雅子・千葉 一恵・長谷川淳子・津田 之子・内藤 容子・宮本 裕子

〈結果〉

タイムサンプリングによる保育実践の分析・結果

		ホール	プレイコーナー	ゆり組	たんぽぽ組	ことり組
子どもの人数	1～5人	61(50.8%)	80(96.6%)	64(53.3%)	5(4.2%)	0
	6～10人	42(35.0%)	15(12.5%)	53(44.2%)	28(23.3%)	0
	11～15人	12(10.0%)	0	3(2.5%)	70(58.3%)	77(64.2%)
	16～20人	0	0	0	15(12.5%)	42(35.0%)
	20～人	0	0	0	2(1.7%)	0
	0人	3(2.5%)	0	0	0	0
	観察不可能	2(1.7%)	25(20.8%)			1(0.8%)
	平均	5.9人	3.8人	5.5人	12.2人	14.8人
保育者の有無	保護者A	0	2(1.7%)	0	0	0
	保護者B	0	2(1.7%)	0	93(77.5%)	0
	保護者C	1(0.8%)	37(30.8%)	0	0	54(45.0%)
	保護者D	0	11(9.2%)	91(75.8%)	1(0.8%)	16(13.3%)
	保護者E	A&B 1(0.8)			0	0
	複数	94(78.2%)		91(75.8%)	A&B 1(0.8)	C&D 49(40.8)
	中計	24(20.0%)	52(43.3%)	29(24.2%)	94(78.3%)	119(99.2%)
	不在	2(2.5%)	43(35.8%)		25(20.8%)	0
	観察不可能		25(20.8%)			1(0.8%)

※たんぽぽ組…ひかりの部屋を含む。

		ホール	
保育者と子どもの関わり	保育者A	ア)	1人 28
			2人 21
			3人 14
			4人 4
			5人 1
			6人 1
			7人
			8人 1
			9人
			10人 1
			計 71(59.1%)
			平均 2.2人
		イ)	13(10.8%)
	ウ)	9(7.5%)	
	B	ウ)	1人 1
	D	ア)	2人 1(0.8%)
	合計 ア) & イ)		69.9%(重複0.8)

		ゆり組	
保育者と子どもの関わり	保育者E	ア)	1人 38
			2人 21
			3人 11
			4人 4
			5人 1
			6人 1
			7人
			8人
			9人
			11人 1
			計 77(64.2%)
			平均 2.0人
		イ)	7(5.8%)
	ウ)	8(6.7%)	
	合計 ア) & イ)		70.0%(重複0.8)

		たんぽぽ組	
保育者と子どもの関わり	保育者B	ア)	1人 37
			2人 28
			3人 8
			4人 1
			5人 2
			6人
			7人
			8人
			9人
			10人
			計 76(63.3%)
			平均 1.7人
		イ)	5(4.2%)
	ウ)	12(10.0%)	
	A	ア)	4人 1(0.8%)
	D	ア)	1人 1(0.8%)
	合計 ア) & イ)		68.3%(重複0.8)

ア) 直接関わる
イ) 見守る
ウ) 関心を払わない

自由保育における保育者の援助の仕方について

〈結果〉

ホールにおいては、平均して5.9人の子どもたちが遊んでいた。保育者の所在の割合は78.2%、不在の場面は20.0%であった。保育者Aが主に子どもと関わっており、直接関わっていた割合は59.1%、見守るが10.8%であった。関心を払っていない場面は7.5%であった。その他に保育者Dがわずかに関わっていたが、

「子どもとの関わりがあった」割合は全体で69.9%であった。”子どもとの関わりがあった”というのは、直接関わっていた、もしくは見守っていた場合に関わりがあったと見なした。

プレイコーナーにおいては、平均3.9人の子どもたちが遊んでおり、保育者の所在の割合は43.3%、不在は35.8%であった（子どもの邪魔により観察不可能が20.8%であった）。子どもとの関わりは保育者Dが多く30.0%、その他に保育者B・C・Eも関わっていたが、

保育者と子どもとの関わりがあった場面は全体で41.5%であった。

「ゆり組」においては平均5.5人の子どもが遊んでおり、保育者の所在は75.8%、不在の場面は24.2%であった。保育者Eのみが子どもと関わっており、70.0%であった（直接-64.2%、見守る-5.8%）。関心を払っていない場面は6.7%であった。

「たんぼぼ組」においては、平均12.2人の子どもが居り、保育者の所在の割合は78.3%、不在は20.8%であった。子どもとの関わりは保育者Bが中心となっており、直接の関わりは63.3%、見守るが4.2%であった。関心を払っていない場面は10.0%であった。その他に保育者A・Dもごくわずかに関わっており、子どもとの関わりがあった場面は全体で68.3%であった。

「ことり組」においては平均14.8人が遊んでおり、保育者の所在の割合は99.2%（観察不可能-0.8%）であった。子どもとの関わりは保育者Cが多く、直接関わるが73.3%、見守るが6.7%であった。次に保育者Dが多く関わっており直接関わるが49.2%、見守るが4.2%であった。子どもとの関わり場面は全体で92.5%であった。

上記の結果から、「ことり組」以外の場所においては、保育者が不在の場面が全体の2～3割と予想外に多いことが判明した。また保育者が子どもと関わっている（直接+見守る）割合もホールと「ことり組」以外の保育室で7割であった。特にプレイコーナーにおいては4割と低い数値を示された。

そこでまず最初の取り組みとして保育者不在の場面を減らすための手だてを検討することにした。

		ことり組				プレイコーナー				
保育者と子どもとの関わり	保育者C	ア)	1人	17	保育者と子どもとの関わり	保育者D	ア)	1人	2	
			2人	19				2人	10	
			3人	19				3人	4	
			4人	19				4人	10	
			5人	10				5人	5	
			6人	2				6人	4	
			7人	1				7人		
			8人	1				8人	1	
			計	88			(73.3%)		9人	
			平均	3.0人					10人	
		イ)		8(6.7%)		計	36(30.0%)			
		ウ)		7		平均	3.6人			
	保育者D	ア)	1人	12	保育者と子どもとの関わり	保育者D	イ)		1(0.8%)	
			2人	23			B	ア)	2人	1(0.8%)
		3人	14				イ)		1(0.8%)	
		4人	7	C			ア)	2人	1(0.8%)	
		5人	1				イ)		1(0.8%)	
		6人	1	E			ア)	1人	2	
		20人～	1					2人	1	
		計	59				(49.2%)		3人	6
		平均	3.0人					計	8(6.7%)	
		イ)		5(4.2%)				平均	2.8人	
	ウ)		1		イ)		1(0.8%)			
合計		ア)&イ)	92.5%	(重複40.9)	合計		ア)&イ)	41.5%		

太田 雅子・千葉 一恵・長谷川淳子・津田 之子・内藤 容子・宮本 裕子

3. 新たに作成した日案の様式・記録簿を用いての実践開始

保育者の目ができる限り隅々まで行き渡るように、そしてスムーズな保育展開がなされるようにと、前日までに打ち合わせを行い、一目で見てわかるような図式化された日案を用いることにした。(図3)これには、設定する遊び・活動の内容、留意点、担当者、教員の配置や移動の様子を書き込むことにした。

図3 日案

自由あそびの環境構成 (遊びの設定・担当)

11月 9日 月曜日 9:30 ~ 10:30

設定する遊び・留意点

ホール——大型箱積木でびびり遊び
・異年齢との交代と深める

たんぼぼぐみ——カード作りの流れから引き続き、えびと使ったローラーや指でスタンプ遊び。
・イメージをゆくらせてローラー遊びを深める。(カウガチャ、形、素材 色彩感を知る)

ひかり——色々なイメージがわくように、さまざまな素材と準備する。(個人製作中心)
・道具の扱い方に留意する。(例 ローター、マジック)

ことりぐみ——野菜作り、カステ作り
・個人的活動から、小さなグループであそびを楽しむことができるようにする。
・道具の扱い方に留意する。(例 ローター、マジック)

前日までの様子
(ホール——大型箱積木を休ませた遊ばせ、製作コーナーでは、えびのイメージで箱積木と組み合わせたアスレチックができる。アスレチックにするのは、アスレチックの製作も行う。草履は組み合わせたから、複雑な構成へとバリエーションある。
たんぼぼぐみ——双履感紙に向けるカード作り。(ローラーを使うのは初めて)
ひかり——個人製作中心(素材としては、ペーパー、マジック、マジック、マジック、マジック)ままこと。園内へ各所に運ぶことも楽しんでいる。
ことりぐみ——バブーからの流れて、様々なお店ができて、(今はカウガチャ、野菜やさん)子供たちのイメージは平面的なものが多いが、教師と共に立体的な野菜作りへと発展している。新聞紙に興味を持ち出した。

担当・役割分担

図4 チェックリスト

ことりぐみ			たんぼぼぐみ			ゆりぐみ		
1			1			1		
2		✓	2		○	2		✓
3		✓	3			3		✓
4		✓	4			4		✓
5		✓	5		✓	5		✓
6		✓	6			6		
7			7			7		
8		✓	8			8		
9			9		✓	9		○
10			10			10		○
11			11		○	11		○
12			12			12		○
13			13		✓	13		○
14			14		○	14		○
15			15			15		○
16		✓	16			16		○
17			17					
18		✓	18		○			
19			19		○			
20			20		○			
21			21					
22			22					
23			23					
24			24					
25			25		○			

9月21日(月) ホール

3階、1階、2階、3階

ことりぐみ: 3階、1階、2階、3階

たんぼぼぐみ: 3階、1階、2階、3階

ゆりぐみ: 3階、1階、2階、3階

○ 4階ホール、3階

自由保育における保育者の援助の仕方について

各教師は自分が担当する場所にやってくる子どもの様子をその場で記録し、これらを基に話し合い、次の指導や援助の在り方や環境構成について検討し実践へと繋げることを開始した。誰がどのような遊びに参加したか記すチェック簿を用意した。(図4) また、教師は手元にメモ用紙を用意して置き、子どもの様子について変化や成長など特記すべき事柄を具体的に記述するようになった。(図5)

9/16 A男 かつこ
「みんぱ (7才) から 11才 (8才)」
1度おそく? A男 → せき気。
おつ まけと すこく (やい) へ 素直な情報をかえたい
ように 必死
B男 1つものグレン → から はなれ?
かいつこに。

図5 その場での記録

4. まとめ

新様式での日案を用いての保育実践は2学期に入ってから開始し、まだ3ヵ月にも満たない状況である為その成果を見極めることは難しい。そこで今回は、自分たちの保育の改善のためにどのような取り組みを始めたのか、その結果、どのような変化が保育に生じたか、また子どもたちの様子はどう変わったかについて途中経過をまとめることにする。以下の5点に沿って記述する。

- 1) 自由保育(チームティーチング)の指導計画(指導案の作成)の上で留意した点
- 2) 実践上、特に配慮した点
- 3) 子供たちの把握の度合いが以前と比べて変化したか。効果的な援助が可能になっているか。
- 4) 子供たちの様子に変化がみられるか。(成長、発達における現われ)
- 5) 問題点

- 1) 自由保育(チームティーチング)の指導計画(日案の作成)の上で留意した点

・5歳児保育室「ゆり組」を閉鎖する。

「ゆり組」は園舎東側の奥まった所に位置する保育室である。ここには活動を設定しないようにしても、誰かしら入り込んで遊んでおり、外から見て子どもたちの様子を知ることが困難なため常時必ず保育者1名が居て園児を見守る必要がある。そうなると残りの4人の保育者で他の場所にいる園児全員をしっかりと把握することに無理が出て来る。また5歳児が自分の保育室のみに留まらず、色々な場所に出掛けて行って異年齢との交流を活発に行って欲しいという願いから、自由保育の時間帯は「ゆり組」を閉鎖し使用しないことにした。

・保育者間の連絡・打ち合わせを密に行う。

自分が担当した活動における子どもの様子について相互に報告し、次の日の活動内容、援助の仕方、担当について話し合い日案に書き込むようにした。3歳児はまだクラス担任との関係作りが重

太田 雅子・千葉 一恵・長谷川淳子・津田 之子・内藤 容子・宮本 裕子

要であると考え、3歳児保育室「ことり組」に設定する活動は3歳児の担任2人のうちどちらが必ず担当するようにした。

・お弁当後のホール担当者を決める。

お弁当後にも自由あそびの時間を設けているが、この時間帯にホールにおいて遊ぶ子どもたちが比較的多い。そこで連絡を取り合い、ホールに必ず保育者が一人は居るように心がけた。

〈実践事例1〉5歳児は「ゆり組」においてお弁当を食べており、食べ終り、うがいを済ませた子はホールに行って遊ぶことを許可しているが、この時5歳児の担任はまだ食事をしている子どもたちに関わる必要がある為、3歳児の担任1名がホールを担当する。全員が食べ終わった時点でゆり組を閉鎖し、5歳児担任はホールに移動する。

・行事との関連性を考慮して環境構成を行う。

〈実践事例2〉

9月23日（秋分の日）に実施されたバザーとの関連

バザー当日、子どもたちは自分で作った買い物袋と財布を持ち、親と一緒に買い物を行った。バザーにおいては、子どもを対象とした『子どもコーナー』も設け、魚つり、ゼリーすくい、ヨーヨーすくい（1回30～50円の子どもチケットを渡して行う）に参加できるようにした。また製作・用意した物を自分たちで販売する『子どもスーパー』も設定した。販売品は、3歳児によるステンシル画の封筒、染紙のしおり、自分たちで栽培した朝顔の種、4歳児によるハンガー、5歳児による「お知らせボード」、木片の首飾りである。4歳児（年中）、5歳児（年長）がお店屋さんとして、交代で販売を行うようにした。

翌々日の9月25日（24日は代休）の自由保育における環境構成として、お店屋ごっこに関連する製作コーナーを「ひかり組」に設定した。バザーでの体験から、その再現遊びが出現するであろうと予想し、プリンやアイスクリームのカップなどの廃材を出しておいた。その結果、5歳児がアイスクリームやおにぎりを作り、お店屋さんごっこを始めた。やがて3歳児・4歳児も参加するようになり、あめ屋など色々な店屋が増え、さらに店の構え、商品名や値段の札、お金や財布、財布を入れる鞆を作ったりと遊びが発展して行った。その後約3週間この遊びは続いた。

自由保育における保育者の援助の仕方について

〈保育記録1〉
9月25日（金）

ひかり組

・いつも通り、各々が自分の思いで製作を楽しんでいる。（この時期、製作コーナーは大変人気で、個人製作が盛んである。）

・教師Mがプリンカップを使って、アイスクリームをつくりはじめると、年長組の男児Kが「先生、何やってるの？」と興味を示し近づいてくる。
（アイスクリームは以前子供がつくっていた物で、それに少し手を加える。）
「アイスクリームがあったから、お店ができそうだと思う！」と教師Mが答える。
男児M「やる、やる！」 2人でアイスクリーム作りがはじまる。

・アイスクリームがたくさん出来上がってくる。
この頃になると、たくさん出来た色とりどりのアイスクリームを見て、年長組や年中組の女児達が「わたしもやりたい。」と遊びに加わってくる。

・教師Mがお店作りを提案する。
箱や色画用紙を使ってのお店作りがはじまる。子供の人数も増えそれぞれが作る物を分担して取り組んでいる。

- ・教師Mと一緒に箱で店構えを作る子ども —— 年長児
- ・のれん用の紙を切って、貼る子ども —— 年中・女児
- ・アイスクリームを作る子ども —— 年中・年長児
（プラスチックのスプーンがあることを伝える。）

・年長組の女児Hがやって来て、「私、おにぎりやさんになりたい！」と言う。
二つ目のお店作りがはじまる。

女児H「おにぎりはどうやって作るの？」
教師Mが手で丸めやすい、白くて薄い紙を用意する。女児Hが黒い画用紙を持って来て、一緒におにぎりを作りはじめる。
女児H「先生の三角だ。私のは丸ね。」
様子を見ていた、年中・女児も加わる。

・お店作りをしている途中で、年長女児や年中男児達がアイスクリームを買い来る。
「まだ、お店開いてませーん。」
「お金持ってきて下さい。」と言われ、お金作りがはじまる。

・お店側の子ども達が、「何円か書きたい。」といってくる。
ダンボールの切れ端を一緒に見つける。
机の下に とマジックで書いて、はり付けている。

アイスクリーム 500円

・お店が開店すると、あっという間にたくさん子ども達が集まってくる。
お金がないと品物が買えないことを知り、製作コーナーへお金を作りに行く。
（色画用紙にマジックやクレヨンで丸を書き、思い思いの金額を書いて切っている。）
お店に来てもお金をもっていない人は追い返されてしまう。
年中・年長児は、自分でお金を作りもう一度買いにいっているが、年少児達は、様子を眺めているだけ。（運良く年長児からお金をもらうことができ、買いに行く子どもが数名いるのみ。）

〈実践事例3〉

10月13日に実施された『ミニうんどうかい』との関連

『ミニうんどうかい』の2週間前、年長組（5歳児）の男児数人がホールにおいて壁をタッチして戻ってくるという遊びに熱中しており、保育者に対しても、『競争しよう。』と誘いかけて来た。子ども側から始まったこれらの遊びとその後予定されている『ミニうんどうかい』とを関係づけ、運動遊びに興味を持てるように、また『ミニうんどうかい』に対して関心や期待が持てることをねらいとして、かけっこ遊びをホールに設定することにした。ビニールテープを床に貼ってスタート

太田 雅子・千葉 一恵・長谷川淳子・津田 之子・内藤 容子・宮本 裕子

ラインを作り、ゴール用のテープ（リボン）やBGMの音楽を用意した。

最初は年長組の男児だけが参加しており、一斉にスタートすることのみに関心が払われていたが、保育者の働きかけによりゴール用リボンを切ってゴールすること、リボンを持つ役割を担うことにも関心が広がって行った。その後、3・4歳児の子どもたちも参加し始めるが、（年齢別に走るというのではなく）学年入り交じって何度も繰り返しかけっこを行った。勝敗には関係なく走ることが楽しいと感じて欲しいという願いに立って、遊びの進展を見守ることにした。何日かスタート＝ゴールするというかけっこが続いた後、運動会のイメージを喚起させる為にはちまき（紙テープ）と応援用のポンポンを準備した。結果、自分の好きな色のはちまきを着けて走ったり、ポンポンを振って友だちを声援する姿が見られるようになった。『ミニうんどうかい』の種目の一つであるつなひきの縄も設定して置いたところ興味を示し、自然な形で『ミニうんどうかい』に繋がって行った。

2) 実践上、特に配慮した点

・製作における道具・材料の多様化

さまざまな年齢や発達段階の子どもたちが一つの製作活動（コーナー）に参加している現状に対応して、使う道具や材料の選択幅を広げるようにした。

〈実践事例4〉

自分のイメージしたものを廃材を利用して作るコーナーにおいては、できる限り多くの種類や形の材料を用意しておいたところ、ある4歳男児は牛乳パックのみを選び出し、それらを組み合わせてロボットを制作した。別の4歳男児もプリンのカップのみを利用してロケットを作った。また絵を描いたり、文字を書くために必要なペン類もマジック、サインペン、鉛筆など種類や太さの異なったものを準備した。結果、手先の器用さや描く絵の緻密さなどに合わせて選択している様子が伺えた。

・集団遊び（運動遊び）における年齢・発達の違いを考慮しての遊びの設定と援助を行う。

〈実践事例5〉

9月18日の昼食後、3歳児の数人がホールにおいて『あちちボール』（転がしドッジボール）を始めたが、やがて5歳児も加わって来た。運動能力の差が顕著で、5歳児ばかりがボールを握ったり、年少児は勢いの強いボールを投げられてすぐに当たってしまうなど、3歳児にとって遊びが面白いと感じられなくなって行った。そこで、保育者は複数の円（コート）を作り、5歳児と3歳児の子どもたちを分けてゲームを展開する配慮をした。

3) 子供たちの把握の度合が以前と比べて変化したか。効果的な援助が可能になっているか。

・前日までの話し合いにより、担当する活動や場所、留意すべき点を明確にして保育に臨んだ結果、以前と比較して子どもたちの様子を把握できるようになって来たと感じる。特に、自分のクラス

自由保育における保育者の援助の仕方について

以外の子どもたちも注意を払って観察しようとする意識が生まれている。

- ・保育者間で子どもについての情報交換を頻繁に行うようになった。
- ・一人の子どもを全保育者で多面的に理解し、援助しようという姿勢が育って来た。
- ・自分が担当する場所を離れる必要がある際には、他の保育者に声をかけるなどし、保育者が不在のスポットを作らないよう努力するようになった。
- ・できる限り担当の場所を離れないよう、事前に手配して置くようになった。

〈実践事例6〉

制作コーナーにおいて、準備したもの以外の材料を子どもが要求した場合、以前はその都度教材庫まで取りに行っていたが（その間保育者が不在となる）、あらかじめ、要求されそうな材料や道具を予想して、余分に担当場所に準備して置くようにした。

4) 子供たちの様子に変化がみられるか。（成長、発達における現われ）

・1学期には3歳児は自分のクラス『ことり組』に設定されている遊び以外は興味を示さなかったが、クラス担任が他の場所に設定されている遊びを担当するようになってからは、活動範囲が広がり、さまざまな遊びに興味を示すようになった。（最初はクラス担任との関わりで遊びを始めたが、やがて活動の面白さや興味によって選択して遊ぶようになった。）

・以前よりもさらに学年が入り交じって遊ぶようになり、3歳児は4・5歳児の行っている遊びに刺激されて遊びを作り出している姿を多く見かけるようになった。年長児の遊びを観察し、それを真似たり再現したりしながら、さらに自分たちのアイデアを加えている。

・どの子も自発的に遊びを選び、長時間ひとつの活動に熱中したり、友達と相互に考えを交換しながら遊び込むようになっている。手持ちぶさたにしている子どもを見かけなくなった。

こうした変化は保育者が子どもたちの遊んでいるスポットに必ず居るように心がけたことから、子どもたちは保育者が傍で見守り、共感してくれることを知り、精神的に安定を得た結果、積極的に遊びに取り組むようになったのだと思う。また、園庭、園舎の使用できる場所を制限したり（保育者の目が行き届くために）、遊びを設定する場をできる限り同じ場所にした為（活動内容は異なる）、子どもたちはどこでどんな遊びをすることができるのかを理解し、今日自分は何をして遊ぼうかという目的を持つことに繋がったと考える。

・片付けにおいて、5歳児が複数の箇所での片付け（園全体）を積極的に行うようになった。3・4歳児も年長児を見習い自発的に片付けを行うようになって来た。

以前は担任以外の保育者が片付けを促してもなかなか応答しようとしなかったが、自分の担任以外との関係も深まったことから、どの保育者の言葉かけや指導にも応じて片付けを行うようになったからであると思う。

5歳児が一番奥にある自分の保育室「ゆり組」で遊んでいた場合は、他の場所の様子に目を向けることが少なかったが、「ゆり組」を閉鎖したことから、ホールや他の保育室で遊び自分のクラスに戻る途中に片付けが必要なスポットを発見する機会が作られたことも一因であると考えられる。

太田 雅子・千葉 一恵・長谷川淳子・津田 之子・内藤 容子・宮本 裕子

5) 問題点：今後の課題

・廊下やプレイコーナーへ遊具やおもちゃを持ち出して、ごっこ遊びやブロック遊びをしている子どもがかなりいるが、限られた保育者の人数からして、これらの子どもたちと充分関わるのが困難である。今後これらの場所の使用の方法や、保育者の援助の在り方について検討していく必要がある。

・園児の様子を把握し、翌日の保育における指導や援助の材料とするためのチェックリストや記録を整理することが思うようにできない状態にある。保育後これらを整理する為の時間を確保し、担当を決めるなどして活用ができるようにしたい。また、まとめる際には、個々の成長・発達の変化が解り、援助の手段がすぐに見い出せるようにまとめる上での視点を明確にし、保育者間で共通理解をしておくことが今後の課題である。

・活動のコーナーが子どもたちにとって利用しやすいよう、また十分なスペースを確保するために余分な材料・道具・遊具を収納し、必要に応じて出し入れができるよう収納棚を配置する必要があると考える。

5. おわりに

この半年間における研究の取り組みは、まず自分たちの保育の現状分析を行うことにあった。個々の子どもの様子を把握して援助する前段階として、子どもが遊んでいる場面には保育者が居て、その様子を見守り、必要に応じて関わっているかということ調べたが、保育者不在の場面が以外に多いという問題を見出した。

保育者が不在の場面が多いことは第一幼稚園に限ったことではなく、日本の幼稚園の特徴であることをC. C. ルイス (Lewis, 1984) が指摘している。ルイスの保育場面の観察記録 (東京近辺の幼稚園) によると、保育者の見えるところにクラスの子どもが全員いるような場面は全体の53%に過ぎず、子どもが活動している場所における保育者の不在は13%である。これは、子ども同士の関わり合いを促し社会性を発達させる為に、保育者の存在感を小さくしておく意図があるとルイスは考察している。

日本の幼稚園が保育者不在の場面があることを許容しているのに対して、米国の幼稚園においては、子どもが居る場面には必ず保育者が居て様子を見守ることを義務づけている。これは子どもの安全性の確保のためであり、怪我や事故を防ぐことを第一の目的としている。

子どもは自分や他者を傷つけたり、園の物を壊す前に責任を持って守ってくれる、事故や怪我を未然に防いでくれる大人が存在すること知っていてこそ、主体的に自己を発揮して行くことができる。その意味においても、子どもが遊んでいる場面においては必ず保育者が様子を見守り、安全のための配慮をして行きたい。

さらに個々の子どもたちの遊びの様子を把握して成長・発達を助長する為には、外面的な表われだけを見るのではなく、今子どもは何を感じ、考えているのか。子どもの頭の中で何が起きているのかを見極めていかなければならない。また、今子どもたちがしている遊びによって何が育つの

自由保育における保育者の援助の仕方について

かも理解していなければならない。保育者は常に神経を集中させて子どもたちの様子を見、頭と心を働かせている必要がある。子どもが保育者の手助けを必要として発しているサインを見逃さず、適切に対応できるよう留意して行きたい。

この研究はまだ途中の段階にあり、多くの課題が残されている。一つ一つの課題に対して検討を重ねて実践へと繋げ、さらに評価と実践を繰り返しながら効果的で質の高い保育実践を目指したいと考える。

引用文献

Lewis, C. (1984). Cooperation and control in Japanese nursery schools.
Comparative Education Review, 28, 69-84

参考文献

太田雅子. (1997). 幼児の発達を促す環境構成について：カリフォルニア州立大学チョコ校
幼児教育施設から学ぶ. 北陸学院短期大学紀要, 41-51

Read, K., Gardner, P. & Mahler, B. C. (1980) *Early Childhood Education : Human
Relationship and Learning*. Fort Worth: Holt, Rinehart and Winston, INC.